

ニック・ビジネスが段階的に入れ替わり、モザイク状に混在する現在の街並みが形成されていった。住宅地図分析によって、それら都市景観の変遷の様相を見ることができた。

後半では、筆者自身のフィールドノーツを提示した。これらは、大久保の街で様々な人との出会いを通じて体験したものである。この方法を用いる事によって、よりリアリティを持って本研究の

大久保という舞台で繰り広げられる活動とその内容を記述できると考え、そのまま取り上げることとした。大久保では、活動する主体によって、多様な捉え方で様々な見方がされ、そして、その見方に基づいた活動がされていた。大久保という街で、様々な「表情」を持つ主体が、協働したり相克したりしながら、活動していた。

カンボディアにおける教育協力活動の実態と課題 ——識字教育を中心として——

生野 知子

開発においては、対象国の国民自身が国の発展や自分たちの生活の向上を目指して、主体的に行動することが必要である。そのために最も重要なことの1つは、その国の未来を担う人材を育成する教育であると筆者は考えている。本論文ではそのなかでも最低限必要な能力を養成すべき識字教育に着目した。

東南アジアで識字率の低さが問題視されている国の1つがカンボディアである。それは不幸な内戦の歴史と深い関係がある。同国は世界で有数の被援助国となっているが、実際にどのような活動が行われているのか、教育分野と識字教育について現状を把握し、歴史と地域性から問題点を明らかにすることが本論文の目的である。研究方法としては文献調査に加えて、教育協力活動における4つの立場の異なる団体を対象に、現地でのフィールドワークと日本での聞き取り調査を行った。

カンボディアが内戦で失ったものは、多くの知識人、書物や建造物、また人々が伝えてきた文化にわたる。そして内戦後の人材不足が教師の質の低下という問題になっている。校舎や教材、文房具の数量も不十分である。教育の質が改善されな

ければ、人々の教育への関心は高まらない。しかし、身につく教育を受けられるのであれば、多くの入学希望者が集まるということが、教師の給料をサポートするNGOの支援によって授業を毎日行う学校の例から分かった。新たな非識字者を生まないためには、まず小学校の就学率・進学率を改善しなければならない。絵本の読み聞かせを行うNGOの活動からも、識字教育や絵本が普及すれば就学率の向上も期待できることが確認できた。

人々の心に大きな傷を遺した内戦は今もなお、地雷事故などで人々に新たな傷を負わせている。その一端をカンボディアのフィールドワークでは肌で感じた。地雷をさける教育やHIV/AIDSの予防教育など、危険から身を守るための教育がカンボディアでは必要とされている。そういった事情を汲み取るために、地域に根ざしたNGO活動と、資金と大きな単位で事業の行うことのできる国際機関や政府機関との相互補完的な協力が今後一層期待される。地域に根ざした活動とは、ローカル・スタッフ、現場で関わる人、地域住民の間の綿密なコミュニケーションの上に成り立つ活動である。

グローバル化する東京の外国人観光客 ——FIT (foreign independent tour) の受け入れをめぐって——

岩崎 雅子

今日の世界ではグローバル化が進行し、物や人の移動が促進され、その中で旅行という形態の人の移動も変化している。空間と時間の短縮

によって目的地も遠距離化し、旅行形態もパッケージツアーだけではなく個人旅行も多くなった。

日本人が海外へ個人旅行することもさして珍しいことではなく、筆者も海外(アジア・南米)でバックパック旅行を体験した。そこには、自由な旅をするバックパッカーと、彼らを顧客とする安宿が存在し、周辺の産業もそれに対応していることが多い。つまりバックパッカーをあてこんだ商業空間が出来ている。

物価の高い日本ではこのようなバックパッカーを受け入れる空間は成立するのだろうか。また、よその排除意識が強いといわれる日本社会で、果たして外国人であるバックパッカーたちは快適に過ごせるのだろうか。

そこで、本論文では日本における外国人観光中でも個人旅行(FIT: foreign independent tour)の実態を検証した。研究方法は、文献研究のほか、外国人向けのガイドブック、インターネットのホームページなどのテキスト分析と、東京都の観光振興課・宿泊施設を利用する外国人宿泊客・宿泊施設の経営者に対する聞き取り調査である。

個人旅行者が多様化する一方で、その受け皿である宿泊施設は、異文化の直接接点の最前線にある。本論文では、より多くの旅行者が5000円以下の低廉な価格で利用できる宿泊施設の形成過程の実態とそこでの文化接点の考察した。考察からいえることはグローバル化に対応して日本も変わりつつあるということである。人の移動の一つで

ある旅行において、FITの側は日本イメージの変化として、宿泊施設の側は異文化に対して寛容になるという形で異文化の相互作用は直接接点の場で見られた。

このような異文化の直接接点の場は、単に世界がグローバル化した結果できたわけではない。今や外国人旅行者受け入れのパイオニアとなった澤の屋旅館は、20年前経営的な背景からやむなく外国人旅行者を受け入れだした。一方でここ5年以内の間に受け入れを始めた宿泊施設は、経営者自身が旅が好きで、気軽に外国人を受け入れる場を作りたいという意思により外国人の受け入れを始めている。つまり、グローバル化と受け入れる側の理由がつかえることによって、現在の異文化接点の場が生まれたのである。

近年、東京都や国をはじめとして行政の側も訪日観光に対して積極的になりつつある。訪日観光客を増やすことは産業を活性化する効果があり、旅行形態が多様化する中で低廉かつ特色を持った宿泊施設は、旅行者が日本を知る上でも手助けとなっている。しかしその一方で外国人旅行者を受け入れることに戸惑いがあるのも事実である。本調査を通して浮き彫りになったことは受け入れの根本にある日本人の排他性である。外国人の受け入れは多くの日本人にとってまだまだ特別な行為なのである。

暖簾の向こう——質屋の実態調査——

牛田 典子

1953年には全国に約2万軒以上あった質屋は、2002年現在、約4千軒にまで減り、東京都内でも約1500軒から約700軒に減った。衰退の原因は、①イメージの悪さ、②認知度の低さ、③新規参入がない、④国民の所得向上、⑤クレジットカードの普及、⑥リサイクルショップの台頭、⑦消費者金融の台頭などが挙げられる。しかし近年は、一部の質屋が生き残りをかけて、時代に合わせた店づくりを始めたため、質屋の二極化がみられるようになった。伝統に固執し、なかばやる気を失いかけている地味な質屋と、きらびやかなブランドショップを併設したり、積極的に質流れ品バーゲンに出店したりしてい

る華やかな質屋とに分岐したのである。

筆者は、台東区の質屋を取り上げ、タウンページ(2001年3月～2002年2月)に掲載されていた質屋28軒をまわって聞き取り調査を行ったが、営業中だったのは21軒であった。1年程の短期間で7軒も廃業していたのである。台東区の質屋は高齢者が経営していることが多く、後継者不足は深刻である。営業中の21軒においても、自分の代で店を閉じることになるという質屋がほとんどである。そして、そのことがより一層やる気を失わせている。台東区の質屋は、若年層の客が少なく、細々と経営している質屋ばかりであり、淘汰されてしまうのだろう。